
大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

眉村みこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

【Nコード】

N0596BA

【作者名】

眉村みこ

【あらすじ】

勇者アレスは魔王クヌプスを倒した。ヴァレンス国には平和がもたらされ、アレス自身もほっと一息、あとはふらふらゆるら暮らししていくだけ。そう思っていた矢先、彼の前で新たな物語が幕を開ける。魔王を倒した勇者を待ち受けていた、対魔王軍とのガチンコバトルより厄介な出来事とは！？「勇者の優雅なリア生活」の世界から一年前の時を描く、眉村みこ、書き手生活へのリハビリ作！ 乞わないご期待、乞う温かなご声援！ なお、このお話はこれ単体で独立独歩、がしゃこんがしゃこんと勇ましく動き回ります

ので、他の二作、「勇者の優雅なリタイア生活」「大魔王のまたいとこ」を読んでいただく必要はありません。

第1話「ことの終わり」

終わりは新たな始まり。

そういう陳腐ちんぷな言葉をアレスは認めない。

終わりは終わり。

おしまいである。

寝物語の終わりは安らかな眠りであり、もしも、その終わりが新たな物語の始まりだったとしたら、

「良い子がいつまでも眠れなくなっちゃうよ！」

ということになってしまう。

そんなことになったらどうなるか。良い子は睡眠不足になり、ふらふらの頭で学校に出かけたせいで勉強が身につかず、落ちこぼれ、そのせいでロクに禄ろくをもらえない職にもつけず、一生貧乏生活を送ることになる。

暗黒の未来予想図である。

そんなものを断じて許すつもりはない。

そういうわけでアレスは、物語の新たな始まりというものを一切認めないつもりである。

彼はつい先日魔王を倒すという冒険をまさに成し遂げたばかりであり、自分……というよりは一生冒険をするつもりなどなかった。

アレスは平和主義者である。

本来の彼には冒険心など微塵みじんもなく、家の縁側みじんで日がな日向ぼっこをしながら、可愛いあの子と寄り添っていられば幸せということなんとも気だるい男子である。十四歳。

それがひょんなことから、「勇者」などという役を務めることになり、「魔王」とやらを倒した。むろんのことアレスは、英雄物語で言うところの光り輝く「勇者」ではないし、敵もなにやら毒々しい感じのあの「魔王」などではない。「魔王」とは、畏れ多くもここヴァレンス王国で反乱の旗を掲げたクヌプスという男オスへの蔑称めいしょうで

あり、それを倒す役をアレスが担ったことから、

「『魔王』を倒すのは『勇者』じゃね？」

というお軽い市民的ノリから、つけられた呼称が「勇者」だった。「勇者」アレスが「魔王」クヌプスを倒したのが、一週間ほど前のことである。

魔王の居城であるところのスタフォロン城を落とした。

魔王軍はそのほとんどが、ヴァレンス王都ルゼリアへと出陣しており、スタフォロンにはわずかな敵兵しか残っていないかった。ここに魔王も留まっていた。理由は明らかではない。

勇者を中心とした少数精鋭メンバーは、首尾よく城門を突破し、中庭から回廊へと鷲進し、最終的に王の間　クヌプスは王ではないのでこの呼称は正確ではないが、便宜的にそう言うておく　へと至った。

魔王クヌプスは、魔法の達人であり、一騎当千の猛者である。いつかのヴァレンス軍との戦では、自ら陣頭に立ち、その強力無比な呪文で、大いにヴァレンス軍兵士の肝に冷や汗をかかせた。永久に冷や汗をかけなくなった状態になった兵士の数も百をくだらない。

そんな猛将相手に数を用意しても仕方ないし、王都ルゼリアへの防衛に兵を割かなければならず、もともと数もいなかったしで、勇者パーティは五人で魔王に立ち向かった。五はヴァレンスにおける聖なる数である。

「五対一だつてよくよく考えれば卑怯じゃねえか」

と考える向きもあるうが、さにあらず、魔王にも従者が数名つき従っており、数的な優位性は、アレス達にはなかった。

始まる死闘。

対魔王バトルは激戦を極めた。

勇者パーティは知恵と力の限りを尽くして戦った。

そうしてどうにかこうにか勝利をおさめたものの、アレス達の傷も深かった。仲間から死人こそ出さなかったがほとんど死に瀕した者もあり、もちろんそれでも魔王相手である、僥倖と言つべきだろ

うが、苦しみの声を上げる仲間を見ながらそういつお気楽な考え方ができるほどアレスはクールではなかった。

「オレはアツい男だからな」

アレスは誰にともなくつぶやく。

なにはともあれ、魔王は倒した。

反乱は治まり、一件落着。

落着はしたのだけれど、ただ、この反乱を収めたことに関して歴史的評価がどう下されるか、それはアレスには分からない。というのも、今回の反乱というのは、民衆による王制打倒という趣が如実にあったからだ。王とその腰巾着の貴族という特権階級への下からの抵抗。もしかしたらこれは成功させてやる方が良いのかもしれない、とアレスも実は反乱収め中に思わないでもなかったけれど、彼の置かれた立場がその思いを少しでも行動へと移すことを許さなかった。

事は終わった。終わったのである。終わったことをどうこう言っても始まらない、という潔い諦めを抱けるほどにはアレスは大人だった。大人でなければ、一団のリーダーなど務まらない。

事は終わった。

魔王を倒したのち、王都を攻めていた反乱軍が蜘蛛の子を散らすように撤退したのはすぐのことだった。魔王クヌプスはカリスマ的なリーダーであり、これを欠いてまとまりを持てるほどの精神的強さは反乱軍には無かったのである。

全てが終わったのだった。

終わりは新たな始まり。

くどいようだが、アレスはその言葉を認めない。

ただし、アレスがある言葉を認めないからといって、その言葉通りのことが起こらないのかというと、もちろん、そんなことはないのである。

第2話「開幕ベル静かに」

アレスは今のんびりと石畳の街道の上、馬車を走らせている。

空はどこまでも高く高く、青く澄み渡って雲のかげらさえ無い。

バーサス魔王戦というラストバトルから一週間が経過していた。

傷ついた仲間の看病をするためと王都を攻めていたクヌプス軍の動向を見守るため、この一週間はスタフォロン城内に滞在していた。

そこへ王都帰還の命が王より下されたのである。と言っても、王は現在病床にあり、代わって政務を執とっているのは王女であるので、実質的にはその王女からの命であるが。

「帰って来てください」

その命は、速やかに反乱收拾の第一功労者を賞し反乱の終結を宣言することによって、国の体裁ていさいを良くするのが目的である。

仲間のなかにはまだ満足に動けない者もいる。王女からの帰還の命はできるようなのであれば全員、難しいようであれば勇者一人でもというものだったので、アレスは、傷ついた仲間とその看護のメンバー、すなわち自分以外の全員を残し、一人スタフォロンを出た。残していく仲間に後ろ髪を引かれる思いのアレスであったが、王女の命を無下にするわけにはいかなかった。

「ああ、ひとりはいやだなあ。みんなと一緒にだったらどんなにいいか……」

御者台の上で、アレスは呟つぶやきをもらした。

枯れて落ちそうになった葉のついた枝をさわさわーと揺らす秋風のような、いかにもさびしげな声である。

それはただ今の好天にまったく似つかわしくなかった。

すると、

「ひとりとはどういうことだ。わたしは数に入れられていないのか？」

すぐ隣から、呆れたような声上がる。

アレスは隣を見たりしなかった。それが目の保養となるような美少女でもあれば話は別だけれど、二十歳がらみの男を見たつてしようがない。なので、前を見ながらぞんざいに答えた。「うん」と「つれないな。これから長い旅を続けることになるというのに。ある意味では伴侶と言ってもいい存在であるのに」

隣からの声は微笑を含んでいる。

「気色悪いこと言うなよ」とアレスは応戦した。「オレが伴侶にしたいのは、感じのいい優しい女の子だ」

「当てがあるのか？」

「ない、全く」

アレスはきつぱりと言った。しかし、そのあとに、

「でも、オレみたいがいい男にはそういう子が見つかるはず!」
と、これもきつぱりと言いつつ切った。

「一カ月お前と付き合って得たわたしの勘によると、お前にはどうもそういう子は見つからないような気がする。アレス」

「ええっ!」

アレスはびっくりして、隣を見た。

豊かな銀髪を無駄に日の光にぴかぴかと輝かせた青年が口の端^はを少し上げている。

「前を見て運転しろ。アレス」

「えー、なんだよ、ズーム。お前、もしかして、そういう能力があるの?」

アレスは言われるまでもなく進行方向に視線を戻しながら、訊いた。

「そういう能力とは?」

「予知能力的な」

「勘だと言っただろう」

「勘か……変な勘を持つなよ!」

「変と言われてもそう感じたのだから仕方あるまい」

「じゃあ、その勘で、オレにはどうという女の子が見つかりそうだった。」

て感じたわけ？」

「ふむ」

ズーマは意味ありげに沈黙考した。

街道脇にそつとたたずむ白い花が、そよ風に楽しそうに揺れている。

「厄介な女の子が見つかるな」

「厄介？」

「ああ」

「『厄介』ってどんなんだよ」

「トラブルメーカーだな。トラブルにお前を巻き込む素敵極まる女の子だ」

「どこがステキ！？　トラブルなんて御免だね。オレはまったり暮らしたい」

「それではわたしが面白くない」

「オレはお前を楽しませることまでは約束してないからな」

「なるほど、確かに。しかし、結局はそうなるだろう。わたしの勘は良く当たる」

ズーマは低い声で言った。

次の瞬間、突然びゅうつという強い風が吹いて、アレスの黒髪をはちやめちゃにした。

アレスは、手ぐしで髪をなでつけながら、不気味そうに隣の青年を見た。

「嫌な風だったな、アレス。何か起こりそうだ」

ズーマがすかさず言う。

「なにを、何かの前振りみたいなセリフ言ってんだよ！　新たな魔王とか、そういうの要らないからね！」

「魔王で済めばいいがな」

「魔王より厄介ってどんなんだよ」

「そんなものはいくらでもあるがな。単に殺し合いをすればいいだけの問題など実は取るに足らないものだ」

「オレとみんながこの半年やってきたことを過小評価するなよな！」
そうツツコミはしたものの、アレスはズーマが言ったことを心底では認めていた。この世には、もっと厄介なことが色々とあるのである。十四年しか生きていないアレスでも、すでに一つ二つはそういうものを経験済みだった。

そうして、そんなアレスの前に、魔王バトル以上の厄介事を経験するチャンスが、再びか三度かみたひは分からないが、今まさに迫りつつあった。

「前から馬が来るようだな」
ズーマが言う。

なるほど、彼の言うとおり、前方からひとつの馬影が近づきつつあった。もちろん、馬がひとり（一頭）で気ままにお散歩しているわけではなく、騎乗している人がいる。軽快に疾駆してくる様子から、乗り手が中々の腕であることが分かる。

アレスは馬車を停めた。

第3話「再会の仲間」

アレスが馬車にブレーキをかけたのは、感じたからである。なにやら怪しげな鬼気とでも言うべきものを、前から来る人馬から。

それに備えるために、馬車を止めた。

魔王戦が終わりハッピーエンディングを迎えたからといって、勇者アレスの心に油断は無い。遠足は、家に帰るまでが遠足である。せつかく魔王を倒したのに、それに浮かれて帰りの道中で石にでもけつまずいて頭を打って大地に還ってしまったら、目も当てられない。まだキュートな女の子といちゃいちゃもしてないのに！「家に帰るまでオレは油断しないし、絶対に可愛い子と知り合ってみせる！」

アレスは心をあらたにして、馬が近づくのを待った。

案の定である。

馬はアレス達の少し手前で止まった。

鹿毛かげの美しい馬だったが、その乗り手はさらに美しかった。

アレスと同じ年ほどの少女である。

馬から降りてアレス達に近づいてきた彼女は、すらりとした肢体と烈火のような赤い髪、薔薇色に上気させた頬を惜しげなく日の下にさらしていた。少女は、土色の旅装であったが、まるで沐浴直後でもあるかのような清新さの中にあっただ。

少女が立ち止まる。

アレスは、彼女の翡翠色に輝く目をじっと見つめた。すでに御者台から地面に降りている。御者台に座ったままでは変に応ずることができないからだ。そうして、アレスの手には剣が握られていた。もちろん、鞆におさめられた状態である。勇者たるもの、いきなり抜き身の剣で人に向かうような酒場のチンピラ然としたチキンぶりを見せつけるわけにはいかない。その剣の他に、マントをはおった

アレスの背には、もうひと振り剣がある。

「さて、見知った顔だが、ここまでわざわざ出迎えに来てくれた様子でもなさそうだな」

御者台を降りてアレスの隣に立っていたズーマが、面白そうな声を出す。

少女は知り合いだった。単なる知り合いというだけではなく、この反乱を共に戦った仲間である。ラストバトルには参加しなかったけれど、今回の戦いを合わせて乗り切った一人。名はコウコ。

「今は王都にいるはずだけどな」

そうつぶやいたアレスは、この反乱中に何度も嗅いだにおいを感じて、顔をしかめた。

そうして、すぐにでも剣を抜きたくなかった。もうチキンがどうこうとか勇者の名誉に関する話などどうでもいい気分である。

というのもアレスがかいだにおいとは、腐臭　血と肉、すなわち死の臭いだったからだ。

仲間の少女と会って、なぜそんな臭いが漂ってくるのか。日なたの匂いとか、花の香りとかならともかく。訳が分からないアレसだったが、その訳のわからなさに向かい合えるだけの意志の強さを備えている。

ただし、もちろん、一緒に向かい合ってくれる者がいれば、それに越したことはない。

隣にいたズーマがすすすつと離れようとしたところを、アレスは逃さなかった。

「なにをする？」とズーマ。

「それはこっちのセリフだ。どこに行くつもりだよ」

アレスは、まるで人見知りの子どもがお母さんにするように、ズーマの服の裾をしっかりと手で握っていた。

ズーマがアレスの手を引き放そうとしながら言う。

「離れて見物しようと思っただけだ」

「オレたち一心同体だろ」

「いや、二心異体だ。放せ。せつかく面白い見物になりそうなのだ」
「誰が放すか！？ 見物役になんかせねー！！ 絶対にお前も巻き込んでやる！」

アレスとズーマがごちゃごちゃやっているのを、少女は冷えた目で見ていた。

アホくさいかけあいをしている最中にも、アレスに油断はない。いや、むしろ、相手の油断を誘おうという意図を若干は持っていることを、彼の名誉のために付記しておく。アレスは注意深く少女の一挙手一投足を心の目でじっと見つめていた。そんなことをするくらいなら、相棒としゃべくるのをやめて肉眼で見ればいいのという批判もあることだろうが、その批判は正当であると言わざるを得ない。

アレスとズーマはしばらくの間ぐだぐだとやっていたが、やがてアレスの手はズーマの服から離れた。

ズーマはすかさず一声放った。

その言葉は、今はもう日常生活には使われていない古い古いものである。

声と同時に、ズーマの体はふわりと宙にいた。そのまま、すーっと馬車の屋根まで浮かんで行ったズーマは、屋根に腰を落ち着かせた。魔法である。それから長い脚を組んで、アレスと少女見下ろした。まさに高見の見物である。

アレスはその様子をうらめしげに見上げてから、そろりと少女の方に目を向けた。どうやら彼女にはひとりですら対するしかないらしい。アレスは覚悟を決めると、一つこほんと咳払いをしてから、

「よ、コウコ！ お久ー！」

快活な声と手を上げた。

それは、なにやら薄暗い雰囲気吹き飛ばそうとするためにことさらに為したものだだったので、わざとらしいことこの上なかった。

少女は無言で、右手を左腰のあたりに差し入れた。

まるで髪を直すかのような自然な仕草である。

すると、少女の手が出現させたのは、見事な白刃だった。

第4話「兎を狩る獵犬を狩る者」

刃を持った立ち姿は、まるで芝居のキメポーズのように綺麗だった。

そうして、芝居だとしたらこれから悪人がばっさばっさと斬られてしまう見せ場となるわけだが、現実に自分でそういう悪人役を演じたくないアレスは、念のため一步下がることにした。

一步下がったって別に悪いことはない。そうしたところで、彼女との距離は十分に声が届くほどの近さであることだし。念には念を入れて、アレスはさらにもう一步下がっておくことにした。用心のためである。虚勢を張るのは匹夫の勇。勇者の勇とは細心の上になり立つものなのだ。

「魔王を相手にして一步も引かなかった勇者が二歩下がる」

頭上からかうような声が降ってきたが、それに応じている時ではない。相手はすでにこちらへの害意で満ち満ちているのである。刀の先を向ける友好の挨拶などというのがあれば話は別であるが。

「で、どういっつもりだよ、コウコ？」

アレスは、問い質した。彼女は仲間である。まずは訊くべきだろう。仲間に剣を向けられても仕方ないような背徳的行為をした覚えはない。

「そりゃあさー、ちょっとはいやらしい目で見たりとかしたときがあったかもだけど、仕方ないだろ！ オレは男なんだから！」

アレスの冗談に、少女は全く反応しなかった。

アレスは無駄だと分かっているにも冗談をやらすには済まないこの素敵に残念な性格を愛してくれる女の子がいつか現れないだろうかともやもや考えたあと、いたらいたでそれもなんだかなあ、と思っ
てしまつて精神の袋小路に迷い込み、テンションを下げた。

「恨みは無いわ」

少女の声は風に鳴る風鈴のように清爽とされていたが、

「けれど、お前をルゼリアに帰すわけにはいかない。ここで死んでもらう」

口にした内容はさわやかさとは対極にあるものだった。少女の足が地を蹴る。

アレスは二歩下がっていた自分の用心深さを心の底から称賛した。そのおかげで、抜刀して相手の刀を弾くまでの時間が十分にあった。ぎいん、と鋼が撃ち合わされる音が空気を揺らす。

「どういうつもりだよ、コウコ！」
十字に重なった剣と剣越しに、アレスは少女の目をにらんで言った。

少女は艶のある口元を静かに開くと、

「ヴァレンスのためだよ」

それだけ言っつて、つばぜり合いをしたまま力任せにアレスの体を押しした。

押し負けることは分かっている。

同じくらいの体格の女の子に力で負けるというのは悔しいことこの上ないが、そんな安いプライドにこだわっていると、高い命を失うことになるのが目に見えているので、アレスは押された反動を利用して、自分から後ろに跳んだ。

そこへ、風を巻いて少女が迫る。

振られる刀。神速と言っつてよい動きだが、アレスは反応している。肩口に横なぎに襲いくるそれを自分の剣で受け止める。少女の細腕のどこにそんな力があるのかさっぱり分からないが、とにかく重たい、重すぎる一撃である。以前、陸上で最強の獣であるリーグルと戦ったときにその前肢の一撃を剣越しに受けたことがあったが、それと大差ない。そう言っつたらさすがに言い過ぎではあるけれど、それほど過ぎもしないような気がするアレス。

少女というよりは、もはや可憐な容姿をまとった化け物である。つまり外見と内面が全然別物。

不安定な体勢で一撃を受けたアレスは、力を受けきることができ

ず横に飛ばされた。ごろごろと地面を転がされたが、頭は冷えてい
る。すぐに立ち上がると、追撃は無い。代わりに、真正面にコウコ
の姿。彼女は、長剣を構えたまま端然としている。よくよくと見れ
ば剣は反りのある片刃。こちらはアレスからは見えないが、その刃
には炎のような紋様が浮いていた。

ヴァレンスの……何だって？

アレスは少しできた間まに考えた。

確かヴァレンスのためだと言っていた。しかし、まさにそのヴァ
レンスのために、アレスはこれまで働いてきたのだった。もちろん、
ヴァレンスとはこの場合、ヴァレンス王や貴族のことを指している
わけだけれど。

実際はアレスはそういうヴァレンスの支配者階級のために働いて
いたわけではなく、もっと個人的な目的で動いていたわけなのだけ
れど、しかし、彼の働きが客観的にヴァレンスのためになったこと
は誰にも否定できるところではない。

「それなのに何で殺されなきゃいけないんだよ！」

アレスは憤然とした声で言った。

しかし、心は水のように澄んでいる。このくらいで取り乱すよう
なヤワな人生は送っていないのだ。

「ずるがしこいウサギがいなくなると、それを狩る猟犬は必要がな
くなる」

言ったのは、コウコではない。ズーマだった。

アレスは、ふうと息をついた。

ずるがしこいウサギ（魔王）がいなくなったので、それを狩る獵
犬（勇者）は必要がない。必要が無いものを生かしておくのは無駄
である。無駄は排除するに限る。そういう分かりやすい理屈。実に
シンプル！

アレスは納得した。

納得せざるを得ない筋道。

納得はしたけれど、アレスがすっかりした気持ちにならなかった

「よは言ひまじまない。」

第5話「覚悟は瞬時に決める」

必要が無くなつたから捨てる。

不用品扱いされたアレスの上から、

「しかし、アンシの意志ではないな、おそらく。君の独断か、コウコ。それとも、ヴァレンス上層部の意志か」

ズーマが続けた。

アンシというのは、かしこくもヴァレンス王女の御名^{みな}である。それを呼び捨てにして口に出せるといことが、ズーマの怖いもの知らずの一端を表していた。そうして、おそらくはズーマに怖いものなど皆無であろうということを、アレスは知っている。

ズーマの問いにコウコは答えない。彼女はただ、アレスを見つめるだけである。

王女の意志ではないだろう、とアレスも思う。というのも、仮に王女の意志であつたとしたら、この事態は拙劣に過ぎるからだ。

もしもオレを殺したいとしたら……。

そんな想像を平然とできるところが、アレスがいかに冷静であるかを物語っている。想像はできるが、いい気分でないことはもちろんである。

想像の結果は、もしも王女が自分を殺したいとしたら、何食わぬ顔で王宮に呼び寄せて、そこで捕殺するだろうというものだった。それが一番簡単である。アレスは、のこのこと王女の御前でかしまつた自分が、武装した兵に周囲を固められる図を思い描いて、ぞつとした。そういう可能性を今の今まで一度も考えなかつた自分の迂闊^{うかつ}さに腹が立ったが、凱旋^{がいせん}した勇者が王女によって捕えられる可能性を考えるなどというのは無茶苦茶であつて、アレスは誰からも非難されることはないだろう。

王女の意志でないとしたら、誰の意志か。

アレスは一応コウコに尋ねてみたが、答えは返って来なかつた。

返されたのは氷のように冷たい視線だけである。

まるで、その視線でもってアレスを突き殺そうとでもいうかのような鋭さだった。

アレスは、同じ見つめられるにしても、恋するまなざしで見つめられたいもんだと切実に思った。

「で、どうするんだ、アレス。大人しく殺されてやるのか？」

ズーマの声は、大きく張り上げているわけでもないのに、やたらとよく響く。

「魔王を倒したつてのに、仲間に殺されてたまるかつ！」

アレスは強い声で答えた。

声は強く張り上げたものの、これはなかなか不利な勝負である。殺意を抱いてかかってきた者を「仲間」と呼ぶところにアレスの甘さがあり、しかもそれが女の子であるということになると、

「女の子はガラス細工のように繊細！ 取り扱い嚴重注意！」

との教育を師や姉弟子から嫌というほど受けてきたので、自然と女の子に対する時にはソフトになってしまつのである。

それでも実力差に大きな開きがあれば別であろうけれど、目前の少女が自分と同程度の實力を持っていることをアレスは知っていた。そうして、同レベルの人間を抜き身の剣で傷つけず制すなどということはずもって無理。

とすれば、なすべきことは一つしかない！

アレスは決断の男である。

彼が速攻で決めた作戦とは、

「三十六計逃にぐるに如しかず」

アレスが唯一覚えている兵法へいほうだった。

つまり、すたこらさっさーと逃走するのである。

いやいや、てか、ちよつと待てよ……。

どこへ逃げようかと考えて、当然仲間の元であるという結論に達した時、そこから想到した事態にアレスは慄然りっぜんとした。そうして、自分一個のことなどよりもまずその点に思い至らなかつた不明を深

く恥じた。全く心乱れていないように思われてちよつとは慌てていたのか、あるいは単なるアホか。後者だとは思いたくないアレスである。

思いついたことを確かめようとする前に、少女によって突きつけられている刃のその先が不意に大きくなった。

コウコの突き。

アレスはのど元へと伸びあがるようにして向かってきた剣の切っ先をかわした。かわしたけれど、首の皮がこそぎとられたような気がする。アレスは、交わしざまに切りつきたい気持ちでいっぱいだったが、どうにかこうにかそれを押さえて地を蹴った。

距離を十分に取ってから、アレスが訊く。

「おい、コウコ！ 刺客はオレにだけか。それとも、スタッフオロンにも送ったのか？」

魔王を倒したメンバーはアレスだけではない。勇者は一人ではなく、パーティなのだ。確かにアレスは中心人物であるけれど、だからと言って他のメンバーは軽視されてしまうような小さな存在では全然無かった。客観的にも、アレスの心情的にもである。

不要になった猟犬は他にもいるのだ。

とすれば、そちらにもコウコの人物が送り込まれている可能性があるがある。

やすやすとやられるような可愛い仲間では全然無いが、今は手負いの身である。いつもなら万が一の可能性も今なら万が百くらいになっっているかもしれない。

「これから死にゆく者に教えても仕方がない」

それがコウコの答えである。

アレスは、なるほどそれもそうだな、と思った。

そうして、自分の感傷と仲間の命を天秤にかけた。

後者の皿がすぐに傾く。

アレスは、覚悟を据えると、持っている剣をポイッと捨てた。

コウコが怪訝な様子を見せたかどうかは、アレスには分からない。

剣をなくしたアレスの手が、自分の背に回り、もう一つの剣の柄を握った。

第6話「勇者の奥の手」

ぎゅつと柄を握りながら、アレスは古い魔法の言葉を唱えた。

「『左の手と右の手を以つて貫く木を取り外す……開け！』」

それは、背の剣の封印を解く呪文である。剣には魔法の錠がかけられており、鍵となる呪文を唱えないと、鞘から抜けないようになっている。そのように使用者を制限するということは、それだけ強力な力を秘めているということである。

背から引き抜かれた剣は、さびついてでもいるかのような汚れた赤色をしていた。刀身の中央には、古の言葉が刻み込まれている。何かをかたどつたかのような象形文字だ。今はもう使われていないむかしむかしの文字である。

剣は、魔法の力を帯びた強力なものであり、魔王クヌプスとの戦いで使用された武器だった。この剣のおかげで勝てたと言えばそれはさすがに自分と仲間の力を卑いやしめることになるけれど、この剣の力が、勝利のための一助になったことは事実である。

そんな凶器を、仲間だと思っていた、しかも女の子に向けなければいけないとは！ アレスにはやり切れない情があるが、しかし、やり切るしかないのが今の彼の立場である。

ここからただ逃げることはできない。逃げれば当然コウコは追いかけて来るだろう。どこまでもどこまでも。それは、アレスが逃げ込む先、すなわち仲間の所まで暗殺者を連れていくということに他ならない。

戦うしかないのである。

かと言ってアレスには、コウコと血みどろの殺し合いをする気はやはり無い。

しかし、そもそも殺しまでする必要は無いのである。

要は彼女を戦闘不能状態にして追って来させなければいいわけで、それは普通は、殺すことよりも難しくなるわけだけれど、背中の剣

ならそうということが簡単に……とはいかないまでも、かなり確実にできるはずだとアレスは踏んでいた。

アレスは通常、呪文を使うことはできないが、この剣の力を借りれば使うことができる。その魔法で、コウコを制するというのがアレスが考えたことだった。ちようどいい感じの捕獲用魔法がある。

ただ一つ、問題があるんだけど……

アレスは、コウコを見据えながら呪文を唱えた。そうして、拳大の魔法の雷球を宙に出現させた。触れるとビリビリっとして、体を麻痺させる効果がある。非常に便利極まりないものなのだけれど、ここで一つ問題が発生する。

というのも、発生した雷球は一つではなく、二つでも三つでもなく、数十個はあるからだ。一個でも十分に成人男性を昏倒させられるところそんなに当てたら、シヨック死してしまうだろう。

アレスの剣は、城門をぶちこわしたり大地を割ったりと、派手なことは得手なのだけれど、ちょこまかとしたことは不得手である。満天の星のようになって現れた雷球を周囲に感じながら、アレスは、はたして剣で斬り合うよりもマシなのかどうか自信が持てなくなった。なので、自分の判断を信頼する代わりにコウコの実力を信頼することにした。

上手く避けて、一二個だけ当たってくれ！

アレスが剣先をコウコに向けると、雷球が豪雨のようにコウコに降り注いだ。その豪雨に少しだけ濡れることを期待するのだから、アレスのコウコへの信頼は大層なものであると言える。

そのコウコが立ち止まっているのを見て、アレスは眉をひそめた。少女は相変わらず刀をゆるやかに構えたまま、微動だにする様子がない。このままでは、雷ボールに滅多打ちになってしまうにも関わらず。

「……弾け」

アレスの耳が、コウコの声をとらえた。

それは先ほど自分が唱えたのと同種の言葉だった。

呪文である。

太古の言葉に応じてコウコの刀が鈍い光を放つ。向かい来る数十の雷球を見据える彼女の瞳は澄みきっている。

大きく振り下ろされた刀は、続いて振り上げられた。それはほんざいな一振りのように見えただけで、彼女に向かつて当たるハズだった魔法のボールは、綺麗に消失し、あるいは弾き宙や地に散らした。

「げえ、まじかよっ！」

アレスはまともな驚いた声を上げた。

事が終わったのち、コウコは事が始まる前と変わらぬ静けさの中にいた。

数十のビリビリ弾は、彼女にかすり傷一つ与えていないようである。

アレスが驚いているその虚をつく格好で、コウコが飛び込んだ。

しかし、アレスに虚は無い。声は上げてても、心は明鏡止水、澄みきっている。

振られたコウコの剣を受け止めて、弾き返す。

「強すぎだろ！ ふざけんな！」

そうして、距離を取る。

コウコの剣術はちまちな振るようなものではなく、一撃必殺を旨としているようで、連続して振られることがあまりない。その場にとどまるコウコに、

「てか、オレより強くねえ？ お前が勇者になれば良かったのに！」

アレスは本心から言った。

そうして、無視された。

ターゲットと会話を楽しむ趣味はあちらには無いらしい。

「さて。盛り上がって来たな」

ズーマが心底楽しそうな声を出すのを、アレスは心底から憎いと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0596ba/>

大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

2012年1月6日13時53分発行